ネパールとネパールの人々（上）

ネパール語通訳（JICA 研修監理員）
野　津　治　仁

（のづ　はるひと）
1960 年奈良県生まれ。ネパール語通訳・翻訳・語学講師。JICA 駒ケ根語学諮問委員。JICA 研修監理員。元（社）日本ネパール協会理事。
ネパールに留学（合計７年８か月），トリブバン大学修士課程でネパール語を専攻した初めての外国人。
主な著書に『旅の指さし会話帳・ネパール』『CD エクスプレス・ネパール語』，翻訳書『ネパール短編集，ナソ・忘れ形見（グルプラサッド・マイナリ著）』など。

近年日本に中・長期滞在するネパール人の数が激増し，2015 年末には５万５千人近くに達し，アメリカを抜いて日本で６番目に多い国となった。本稿執筆時（2016 年５月）には推定で６万人を超えていると言われている。特に東京とその周辺に多く，これまでコリアンタウンとして知られてきた JR 新大久保駅・大久保駅を中心とする界隈は，今やネパール人が経営する飲食店や海外送金業者が目立つようになってきている。よくあるネパール人がやっているインド・ネパールレストランと違って，ちゃんと本格的なネパール料理が楽しめるし，コンビニや電車の中でも普通にネパールの人を見かけるほど身近な存在になっている。ネパールの人々というのはどのような人々なのか，その国民性や考え方の元になっているものは何なのか，今号と次号２回にわたって考えてみたい。

【ネパール】

ネパールは北を中国のチベット自治区と，南と東西をインドと国境を接する東西に長細い（よくレンガの形にたとえられる）国である。世界最高峰エベレスト（ネパール語名は「サガルマタ」，標高 8,848m）はネパールと中国（チベット自治区）の国境線上にある。日本ではテレビ等でヒマラヤの風景やチベット系の民族が取り上げられることが多かったせいもあり，雪山の国，寒い国，チベット仏教の国というイメージが強い。しかし緯度は沖縄や台湾あたりで，南のインド国境にそって東西にのびる低地では亜熱帯地域が広がっている。全体的には伝統的にインドの文化，言語，経済の影響を強く受けてきた。現在のネパールの国土となっている地域は，有史以前からバーラトバルサと呼ばれるインド文化圏に含まれていた。

民族的にも大まかにいうと，北はチベット系モンゴロイドの民族文化，中部から南部にかけてはインド・アーリヤ系の民族文化の影響を色濃く受けているといえる。国土はおおむね北のヒマラヤ地方，中部山間地方，南のタライ平地地方に分けられ，北海道の２倍弱（約 14 万７千平方キロメートル）の国土面積に，文化・言語が異なる 100 以上と言われる民族が暮らす多民族国家で，3,000 万人弱の人口がある。

【略史】

今のネパールの地域には，数千年の間に西（南）からはインド・アーリヤ系の，そして北（東）からはチベット・ビルマ系の言語を話す人々が移動して来て，お互いに影響を与え合いつつ，混じったり争ったりして今日に至っている。人々のことを知るためには，その国の成り立ちについて知ることは一つの重要なカギとなる。ここでネパールの歴史に少しふれておきたい。

古代ネパール（４－５世紀ころ～９世紀ころ）よりカトマンズ盆地に発達したリッチャビ王朝では既にインド方面からヒンズー教，仏教，またカースト制度（四姓制度）が取り入れられ，行政機構も整っていたらしい（それ以前の歴史は伝承によるものしかない)。今にも残る石の彫刻などからも当時の進んだ技能・文化がうかがえる。９世紀の後半以降12 世紀ころまでは歴史的にはあまり資料もなくよく分かっていないが，13 世紀にはカトマンズ盆地にマッラ王朝が成立した。15 世紀の終わりころにはマッラ王朝が３つに分裂，カトマンズ，バクタプル，パタンのそれぞれに王朝が存立した。この時代の王宮建築や彫刻，また祭りや生活文化も今に伝わって息づいている。

そのころ，現在のネパールにあたるカトマンズ外の地域でも 40～50 の小土侯国が群雄割拠し，勢力を争っていた。そうした中，ゴルカ地方にシャハ一族の小さな勢力が成立した。それが 18 世紀になるとプリティビ・ナラヤン・シャハ王という傑出した王が出て勢力を大いに拡大し，ついには 1769 年にカトマンズを陥落させネパールを統一し，19 世紀の初頭までには現在のネパールよりも更に東西に広い地域を支配下に収めることになる。これが 2008 年王制が廃止されるまで約 240 年続いたシャハ王朝（ネパール王朝）である。

1814 年～1816 年，英国（東インド会社）との間でいわゆる英ネ戦争がおき敗北。終戦に際し（スゴウリ条約）東西及びタライ平地の領土がインドに組み込まれることとなったが，後にタライ地方の一部がネパールに返還され（仏陀釈尊の生誕地ルンビニを含む)，ほぼ現在のネパールの国土が確定した。またスゴウリ条約により，傭兵とし英領インド軍にネパール兵士を受け入れることとなった。これがいわゆるグルカ兵の始まりである。

1846 年，ジャンガ・バハドゥル・クンワルがコート事件と呼ばれる宮廷内の大虐殺事件によって宰相となり，２年後には由緒あるラナ姓を名のり，以降 1951 年までの 104 年間にわたり国王を傀儡化して，ラナ家一族が実権を握る。国王を「マハラジャディラージュ（王の中の大王)」としたうえで，自らは「マハラジャ」（大王）を名乗った。

ジャンガ・バハドゥルは 1850 年にはイギリス，フランスを歴訪。近代化の進むヨーロッパを目の当たりにし，1854 年にはネパール初の成文法である「ムルキ・アイン」（国の法）を制定する。現在の「ムルキ・アイン」は 1954 年の「ムルキ・アイン」の改正ではなく，1963 年に新たに制定されたもので，名称は同じで同様の内容も含まれてはいるが，それとは別の新たな法律であるとされている。この「ムルキ・アイン」を日本や国連の支援を得て更にこれを整理しなおし，民法，刑法，民事訴訟法，刑事訴訟法，量刑法の５つの法案が現在立法府議会（日本の国会に当たる）で審議されており，今年（2016 年）秋には成立が期待されているのはご存じの通りである。

さて，この 1846 年〜1951 年のラナ家一族による専制時代（ラナ時代）は，しばしば日本の江戸時代の徳川家と比較される。ラナ家も武人階級（クシャトリヤ）の出で，軍では commander in chief（軍最高司令官）すなわち将軍であり，行政面では prime minister（宰相）となった。徳川将軍が征夷大将軍であり，（生前又は没後に）太政大臣となったのと通じるものがある。しかし日本の江戸時代には町民文化が発達したのに対し，この時代ラナ家を中心とする貴族階級のみ近代化が進められ，一般庶民に対しては愚民政策がとられた。

北はヒマヤラ山脈，南はタライの亜熱帯ジャングルに守られ，英軍との戦いには敗れたものの植民地となることはまぬがれ，英国政府の駐在官を置くことになったが基本的には鎖国政策をとり続けた。なお仏僧河口慧海が日本人として初めてネパールへの潜入に成功したのは，チャンドラ・シャムセール治世の 1899 年のことだった。

第２次世界大戦が終結し，隣国インドも民主化運動が行われ英国からの独立を果たすと，ネパールからインドに逃れた学生たちを中心としてラナ家専制政治打倒の機運がもりあがる。1947 年には，今のネパリ・コングレス（ネパール会議派）党の前身であるネパリ・ラストリヤ・コングレス（ネパール国民会議派）や，左翼系政党の前身であるネパール共産党が設立され，ついには 1951 年，ラナ家専制政治を打倒し王政を復古させた。トリブバン国王は鎖国を解き，さまざまな分野で近代化をすすめようとした。

1959 年，英国とインドにならったネパール初の憲法「ネパール王国憲法」が制定され選挙が行われ，コングレスの B.P. コイララがネパール史上初の民選首相となった。しかし時の国王マヘンドラは突如憲法を停止，全権を掌握した。俗にいう王様クーデターである。これにより議会は解散。政党を廃し，国王親政によるパンチャヤト議会制度が 30 年続いた。

1989 年のインドの経済封鎖や，パンチャヤト制度に不満を持つ政党の不満，東欧諸国の独立民主化などもあり，民主化の機運が高まり，1990 年パンチャヤト制度は廃止され，新憲法が制定された。これにより複数政党制による議会政治が復活，それまで主権が国王にあったものが主権在民となり，また憲法には多言語・多民族国家であることが明確に規定された。

しかし議会政治が始まってもいきなり国民全体が豊かになるものでもなく，そのような不満を抱く農村の少数民族をまきこむ形でマオイスト（ネパール共産党毛沢東主義派）が人民戦争を開始，10 年に及ぶ武力闘争で政府側マオイスト側あわせて 15,000 人の犠牲者を生んだ。この間 2001 年６月には王宮殺戮事件によりビレンドラ国王一家は全滅，ビレンドラの弟のギャネンドラが即位するも，ことあるごとに大権を発令し，自ら親政を行った。これに反発した主要７政党とマオイストは 2006 年 11 月に歴史的和平合意に達し，翌 2007 年１月には暫定憲法が公布されマオイストを含む暫定内閣が発足。その後 2008 年４月に制憲議会選挙が実施され，同５月 28 日制憲議会の初日に連邦民主共和制への移行と王制の廃止を宣言。暫定憲法では制憲議会発足後２年で新憲法を制定することが規定されていたが，各党の思惑が一致せず第一次制憲議会は憲法を制定することができなかった。2013 年 11 月に第２回目の制憲議会選挙が行われ，ネパール大地震後の 2015 年９月によ

うやく新憲法が公布された。制憲議会は新憲法の発布とともに立法府議会に移行，これまで滞っていた地方選挙の実施，新憲法の元での国会の選挙を行わなければならないが，大地震後の政府としての対応の遅れや，州の分け方に不満を持つタライ地方の政治勢力（マデシ）やその他少数民族の抵抗等々のために，いまだに選挙は実施できずにいる。

【世界に誇れる仏陀釈尊とエベレスト】

ネパールの人が世界に誇れるもの，それは，これといった産業や突出したものがあまり見当たらない中で，世界最高峰エベレストと平和の使者，仏陀釈尊（シッダールタ・ゴウタム）の生誕地ルンビニがネパールにある，ということだ。

「ネパール」と呼ばれる地域は古代から存在していたが，それはほぼカトマンズ盆地に限られていた。上の略史で見たように18世紀にネパールが統一されなければ，あるいは当初のスゴウリ条約に従いタライ地域が英領インドに割譲されたままネパールに返還されていなければ，インド国境に近い仏陀の生誕地ルンビニを含むタライ地域は今もネパールではなかったはずだ。仏陀の生年には諸説あるが紀元前7世紀から紀元前5世紀の間であることはほぼ間違いない。仏陀は当時コーサラ国の属国シャキャ国の王子であった（シャキャ国の首都カピルバストゥも現在のインド領内にあったのかネパール領内かで論争になっている）。そのころその地はネパールではなかったし，カトマンズ盆地にも当時ネパールという国が存在していたという証拠もない。2011年統計では，仏教徒の割合は，圧倒的多数を占めるヒンズー教徒に比べると決して多くない（仏教徒約9％，ヒンズー教徒約81％）。

実はエベレストが世界最高峰であると分かったのはそれほど古いことではない。1850年代になって英領インド測量局が測量した結果，ネパール領内にある名前すらない山（インド測量局ではピーク15と識別されていた）が世界最高峰であると判明した時からである。この山は前任測量局長の名前をとってエベレストと命名された。ネパール政府は，1960年代以降「サガルマタ」（天に額が届く山の意味で）としている。実際のところカトマンズ盆地内からは直接エベレストは見えないのだが，外国人観光客に「エベレストはどの山だ？」と聞かれたネパール人ガイドが「あれだ！」と言って，全く別の山であるガウリシャンカルを指さしたのを，そのすぐ横で見ていたことがある。

このように，ネパール人が世界に誇るこの二つの地は，皮肉なことに現在のインド国境近くと中国との国境線上にある。現在たまたまネパール領土内にあるというだけなのだが，それでも何かというと合言葉のようにこの二つがもちだされる。「仏教はヒンズー教の一部なのだ」とヒンズー教の優位性，寛容性を普段口にする人も，こと仏陀に関してはインドではなくネパールで生まれたのだと熱弁をふるうし，実際には見たことはなくても，世界最高峰のエベレストはネパールにあるのだと自慢する。平和の象徴である仏陀がネパールで生まれたことを誇るよりも，ネパールが世界の中でも平和な国だと誇れるようになることの方が大切なことであり，世界からも敬意をもって見られるだろうと思うのは筆者だけではあるまい。

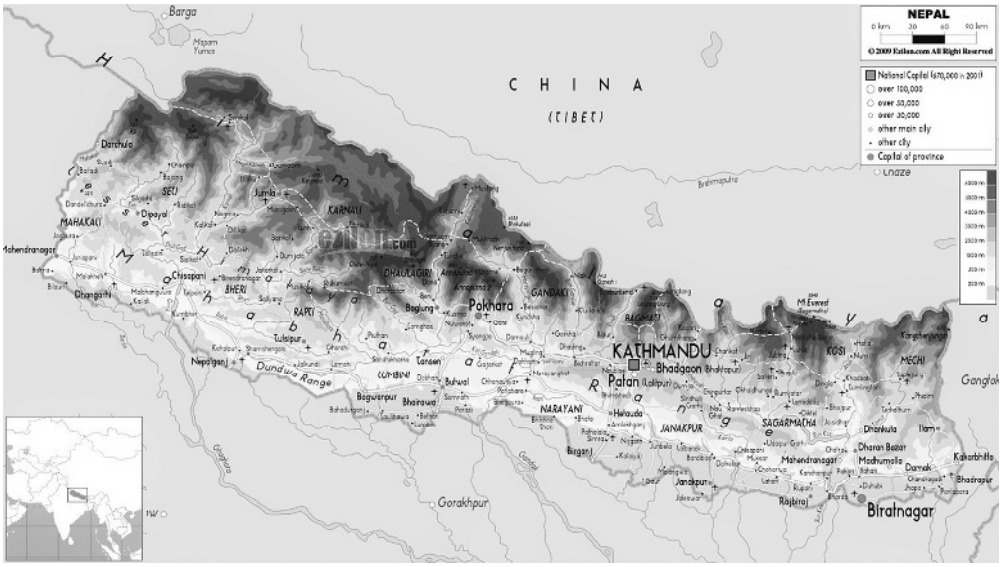
今号では，ネパールを知る基礎知識として，まずその国土と歴史について概観してみた。では，そこに暮らす人々は普段から何をどのように考え，どのような価値観で生きているのだろうか。次号では更にネパールの人々の実際に迫ってみたいと思う。

【参考文献】

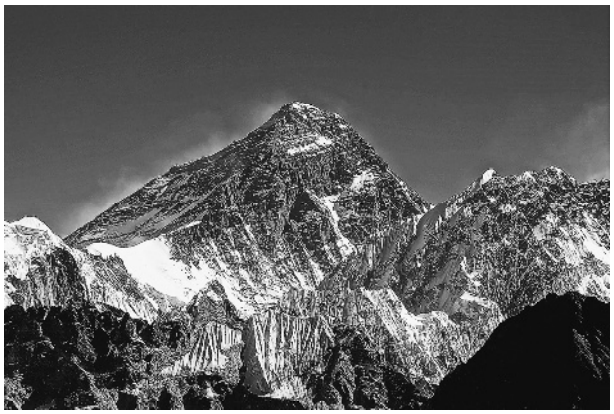
石井溥編『暮らしがわかるアジア読本　ネパール』河出書房新社，1997 年
外務省『ネパール連邦民主共和国基礎データ』外務省，2016 年
辛島昇他編『[新版〕南アジアを知る事典』平凡社，2012 年
佐伯和彦『世界歴史叢書　ネパール全史』明石書店，2003 年
野津治仁監修『アジア語楽紀行　旅するネパール語』日本放送出版会，2007 年
法務省「在留外国人統計　2015 年 12 月末」法務省，2016 年

ネパール略年表

年	できごと
BC７ 世 紀～BC５ 世紀頃	コーサラ国の属国シャキャ国の王子，シッダールタ・ゴウタム（後の仏陀）が現在のネパール領内ルンビニで誕生（生年には諸説有り）
４－５世紀～９世紀	カトマンズ盆地を中心にリッチャビ王朝（ネパール王国）が栄える
11 世紀初頭	ネパール語による最古の碑文
11 世紀中葉	現在のネパール西部にカス・マッラ王朝成立
13 世紀～	カトマンズ盆地にマッラ王朝
15 世紀	マッラ王朝がカトマンズ，バクタプル，パタンに分裂
16 世紀	ゴルカ地方にゴルカ王朝（シャハ王朝）成立
1769 年～ 2006 年	プリティビナラヤン・シャハ王によってカトマンズ盆地制圧，ネパール統一，シャハ王朝（ネパール王朝）
1814 年～1816 年	英ネ戦争，スゴウリ条約により終戦
1846 年～ 1951 年	ジャンガバハドゥルによるコート虐殺事件により，ラナ家専制政治時代
1850 年	ジャンガバハドゥル英・仏歴訪
1854 年	ネパール初の成文法「ムルキ・アイン」制定
1899 年	河口慧海，日本人として初めてネパール潜入
1947 年	インドにてコングレス結党，つづいて共産党結党
1951 年	トリブバン国王による王政復古，複数政党制
1953 年	エベレスト山世界初登頂
1956 年	日本ネパール外交関係樹立
1959 年２月	ネパール初の憲法「ネパール王国憲法」公布
1959 年５月	B.P. コイララが初の民選首相に選出
1960 年 12 月	マヘンドラ国王非常大権行使，憲法停止，パンチャヤト制度導入
1963 年	新「ムルキ・アイン」制定
1990 年	各政党が共闘する形での民主化運動によりパンチャヤト制度廃止，新憲法制定，複数政党制再開
1996 年２月	マオイストによる人民戦争開始
2001 年６月	王宮虐殺事件によりビレンドラ国王一家全員死亡，弟のギャネンドラが王位につく
2006 年 11 月	政府とマオイストの間で包括和平協定，マオイストの人民戦争終結
2007 年１月	暫定憲法制定
2008 年５月	制憲議会選挙（第１回）後，制憲議会初日に共和制を宣言，正式に王制廃止，国名が「ネパール連邦民主共和国」に
2013 年 11 月	第２回制憲議会選挙
2015 年４月	ゴルカ地方を震源とするネパール大地震，本震とその後の余震により，9,000 人近い死者・行方不明者
2015 年９月	「ネパール国憲法」公布，直ちに施行，制憲議会は立法府議会に移行



ネパール地図



世界最高峰エベレスト

仏陀釈尊の生誕地ルンビニに
建てられたアショカ王石柱

ネパール最大のヒンズー寺院

マッラ王朝の遺構（旧パタン王宮）